

主 題：生ける死人 2

聖書箇所：ローマ人への手紙 6章11節

血気盛んな高校球児が激しい口論の末、相手に対して今にも手を出そうとしたそのとき、横にいた友人が止めます。それは暴力になると甲子園出場ができなくなるからです。彼は自分の立場がよく分かっていたのです。何としても甲子園に行きたいと願っている球児であることを。だから、彼は感情を制御したのです。人は自分が誰であるのかをよく理解したときに、そこに付随する責任を全うしようとします。私自身、夫となり父親となってそれまでの自分とは違っていることを実感しています。自分に与えられた責任を自覚し家族を優先しようとします。

前回、クリスチャンである自分はどのような者なのかを思いなさいとパウロは教えました。罪に対しては死んだ者であることを確信するのです。私たちはイエスとともに十字架につけられた、古い自分はもう死んだのです。死は現実のものであり、その結果、罪の支配から解放されたのです。もう罪を犯さなくても良い者となったのです。

このローマ6：11からパウロが教える二つ目のことは、

II. 神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者

死んでいると同時に、いのちをもっていることを覚えるのです。キリストにあって生きているとは、私たちの内側に新しいいのちがあることです。そのいのちを実践してゆくことによって神の祝福を受けるのです。日々の生活においてどのように正しく歩んで行くのか、その秘訣を学んで行きましょう。文脈から見てゆきます。

1) 私たちの内に新しいいのちが存在する。 6：4－11

古い自分はもう過ぎ去ってキリストの復活に与る者となったのです。4節「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにおいて新しい歩みをするためです。」、そして5節、「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」と、パウロは言います。私たちはキリストの復活のゆえに生きているのだと。ガラテヤ2：20には「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」とあります。私のうちに変化が起こり、キリストとともに生きる者となったというのです。続いて、6－11節、「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。8 もし私たちがキリストとともに死んだのであれば、キリストとともに生きることにもなる、と信じます。9 キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはなく、死はもはやキリストを支配しないことを、私たちは知っています。10 なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるのだからです。11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」

8－10節を見ると、新しいいのちはこの地上において実践されるべきものだと言います。罪の支配から解放されて、私たちの主人は復活されたイエス・キリストです。私たちは義の奴隷となったのです。私たちのいのちはこの支配者のものなのです。ルカ9：23には「イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」とあります。古い自分を脱いで新しい自分を着る者となったのです。新しいいのちは私たちのうちに確かに存在するのです。

8：2「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」、8：9－11「けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。10 もしキリストがあなたがたのうちに住んでおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。：11 もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、

あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。」

キリストのいのちが聖霊を通して私たちに送られ私たちのうちに生きておられるのです。このいのちは非現実的なものではありません。完全な現われは栄光のからだに変えられるときですが、この地上を生きる私のうちにこの新しいいのちが働いているのです。そして、このいのちは罪の支配の中にはないのです。このことをよく理解して自分の生活を考えて歩みなさい、それこそ世に証するものとなるのだとパウロは教えるのです。たとえ、そこに喜び、平安がなくても、困難が来ると分かっている、キリストのいのちの中に生きるのです。「私は生きている」ことを自覚するのです。

2) 新しいいのちを実践するために必要なこと 6：12－14

これを一言でまとめるなら「決心」です。このことをパウロは三つの命令によって教えるのです。(1)と(2)は否定的、(3)は肯定的に教えています。12節の初めに「ですから」とあるのは、それまでのまとめと次の発展を示します。

(1) 死ぬべきからだを罪の支配にゆだねてはいけない。 12節

12節「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。」、これを原文通りに訳すと「あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねてはいけません。それによってあなたが情欲に従わないためです。」となります。この「支配」とは王や王国と関連することばです。王の権威のもとにある、私たちの上にある権威や力を示します。ここで禁じているのは「罪が継続的に支配すること」です。その結果が「情欲に従う」ことになるのです。禁じているから止めることができるのです。「あなたはそれを止めることができる」というのです。もう、あなたの支配者はちがったのだから、あなたの支配者を思いなさいと教えるのです。

(2) 手足を不義の器として罪にささげてはいけない。 13a節

13a節「また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。」と、罪の願望のために用いてはいけない、たとえ肉体の一部であっても、心の思いであってもと言います。ほんとうに救われたのなら罪の従属から離れるべきだと言います。クリスチャン生活のすべてはここから始まります。パウロはローマのクリスチャンに教えました。キリストにある生涯を歩むことができる、神に喜ばれる歩みが証になるのだと。私たちは罪の習慣の中に長い間生きてきましたから、強い決心によって、くり返しくり返し自分がどのような者か、だれの支配の中に生きるのかを思うことが必要です。

(3) 義の器として神にささげなさい。 13b節

「むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」、この「ささげなさい」とは「ただ一度だけ」という動詞です。(1)と(2)は「今までこうだったからこれからはそうでないように」と、(3)は「あなたは今この瞬間から変わらなさい」と、神への献身を教えるのです。神にのみへの心からの傾倒です。犠牲的に神に仕えてゆく、忠実に仕えて行く決心です。感情ではなく「もう罪の支配にはない、神にある者とされた」という事実に基づいた決心をしなさい、揺らいではいけないと言うのです。

14節「というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下ではなく、恵みの中にあるからです。」と、クリスチャンならこれを忘れてはいけないと言います。罪は存在します。しかし、それは罪を犯しても良いということではありません。罪との葛藤があっても、自分は罪の支配の中にはないのだと自覚するとき、また、自分がだれであるのか、何を目標としているのかをよく理解するのなら、罪を犯すことを留めることができるはずです。